

龍ヶ谷城(真選定重要遺跡)

と藤田・用土氏 その1

社会教育担当 望月 暁

龍ヶ谷城について

龍ヶ谷城は大字三沢にある城跡で、曲輪(※1)や堀(※2)などが良好に残ることから県の選定重要遺跡に指定されています。

町内と周辺の城

龍ヶ谷城が造られた室町時代は、後半になると各地で大名や国衆と呼ばれる存在が登場し、拠点である城が造られるようになります。

町周辺の城には龍ヶ谷城のほか高松城、寄居町の花園城、長瀬町の天神山城などがあります。龍ヶ谷城を拠点としていたのは用土氏といわれ、花園・天神山城の藤田氏と関係が深い一族です。両氏については次回以降紹介します。今

回は龍ヶ谷城について詳しく見ていきましょう。

龍ヶ谷城

龍ヶ谷城の本曲輪は山頂にあり、用土新左衛門をまつるとされる石宮もあります。冬の立ち枯れの時期には長瀬から日野沢まで一望でき、この場所に城を造った理由が分かります。

山頂北側は急崖になっており、崖下から伸びる尾根に豎堀を設けます。この尾根は下田野の愛宕山へ続きますが、途中で妙音寺跡へつながる尾根が分かれています。妙音寺や愛宕山、麓にある西福寺跡は龍ヶ谷城や藤田氏との関わりが伝えられています。

山頂南側には、本曲輪を取り巻くように広がる二の曲輪があり、ここまでが城の中心と考えられます。二の曲輪の縁には南から東尾根にかけて高低差が約3mある横堀を設け、連続して東尾根を堀切ります。東尾根の先にはさらに連続して2本、堀底との高低

差が3mある堀切(※3)を設けます。

横堀から西側は切り落とされて急崖となっており、山頂から発する西尾根の周りは3本の豎堀で固めます。周辺には露頭もあり、攻めにくい地形です。露頭を下った先には肩の曲輪を設けます。ここから南側へ尾根が伸び、階段状に帯曲輪が2つ設けられています。両曲輪の高低差は5m

です。下の曲輪周辺には、豎堀と横堀の機能を兼ね備えた深さ2mの大規模な堀や、土壘と石積みで造成した堀切などが集中的に配されています。平坦部を経た先には、門跡と伝わる場所があり、すぐ下にも小さな帯曲輪と豎堀が残ります。尾根を下った麓には茶坊主屋敷と呼ばれる曲輪があります。

これら尾根上とは別に、東尾根の下側には、斜面を造成した帯曲輪があり、石積みも残っています。曲輪周辺は豎堀と横堀を組み合わせるように配置しています。

用語

※1 曲輪：郭とも書きま
す。塀や土壘などで区切
られた場所のことで、山城
の場合、尾根や斜面を平坦
に造成します。城の中心を
本曲輪と呼びます。形によ
って帯曲輪、腰曲輪などと
区別します。

※2 堀：土を掘り、高低
差を設けることで城を守
る施設です。斜面を進む敵
を防ぐため、斜面と並行に
掘った豎堀、曲輪を取り巻
くように掘られる横堀など
があります。

※3 堀切：尾根伝いに進
む敵の動きを遮断するため、
尾根を断ち切ったものです。

